

▼CNCP レポート：身近な土木遺産シリーズ第 10 回 コミュニティ・インフラとしての関原の森

特定非営利活動法人 あだち・まちづくり・commons
事務局長・まちづくりプランナー
(株) LAU 公共施設研究所
松沼 勝



■愛恵学園から関原の森へ

—愛恵学園の活動と地域

関原の森は、地域に根ざし様々な人々から親しまれ、利用されているコミュニティの核ともいえる施設です。



《1933年当時の愛恵学園 出典：愛恵学園物語 50年の軌跡より 以下同資料》

この『コミュニティの核—コミュニティ・インフラ』としての関原の森が、整備される要因となった愛恵学園と地域との結びつきについて、少しふれておく必要があります。

愛恵学園は、キリスト教の日本メソジスト教会の社会福祉施設として、1883年（明治16年）に台東区浅草に設立した美以美（みいみ）尋常高等小学校が前身です。

美以美尋常高等小学校は、当時貧困やその他の理由で就学できない家庭の児童のために設立された私立の小学校でした。1923年（大正12年）9月1日の関東大震災で焼失し、震災による帝都復興事業のための土地区画整理事業により再建が不可能となり、教会本部は別の土地で事業の再開を目指し、足立区の本木地区にその場所を見出し、1929（昭和4年）に美以美尋常小学校の後身として、新たな事業展開をも視野に入れ隣保事業*を再開しました。

※メソジスト社会事業団体：隣保事業として愛隣団（日暮里）、根岸会館（根岸）、愛清館（亀戸）、共励館（吾嬬）を実施していた。詳しくは、《関原の森ホームページ愛恵学園の歴史》を参照してください。

(<http://sekibaranomori.com/history/>)



《学園初のクリスマス会 出典：愛恵学園物語》

当時の本木地区は、様々な問題を抱えた地区で、戸籍のない子どもたちが町中にあふれていました。愛恵学園は、これらの子どもたちとその親をも対象として、色々な事業を開始します。

特に当時、最先端の取り組み例として乳幼児健康相談事業や地域への救済部事業、光の家事業などを実施しました。

戦前戦中戦後、高度経済発展の過程で、徐々に愛恵学園の役割が変化し、最終的には幼稚園の経営が主となっていました。

しかし、昭和から平成へと時代が変わる中で、学園の役割とともに児童数が減り幼稚園の経営も難しくなっていました。

■愛恵学園と地域、関原地区のまちづくりの活動

一方、足立区では、区内で最も住環境や防災上問題のある「本木・関原地区」において、これらの問題改善のためのまちづくりを、昭和50年代後半よりの調査検討していました。また、この時期（1980年代後半）は、災害への危険性の高まりを受けて、国や東京都によって防災まちづくりのための様々な事業が創設されています。

関原地区は、足立区のまちづくりのバイブルである「地区環境整備計画」の第一号事業地区として、「第19地区（関原一～三丁目）環境整備事業」を開始しました。

関原二・三丁目地区に防災生活圈モデル事業を1985（昭和60）年に、関原一丁目には密集住宅市街地整備促進事業（旧コミュニティ住環境整備事業）を1987（昭和62）年に導入しました。



《事業開始当時の愛恵学園》



《まちづくりイベントの地域との共同開催》

愛恵学園と地域のまちづくりのつながりは、この「関原一丁目コミュニティ住環境整備事業のまちづくり」の中で大きく、強固にはぐくまれることとなります。

このまちづくりは、当初から地区の住民に受け入れられることはありませんでした。住民自らも地区の問題や課題は理解していましたが、これらの改善にあたる術を持っておらず、協議会による話し合いによって、行政に頼ることしか方策がなかったといえます。

そのような状況の中で、地区の中で行われる大小のイベントへまちづくりの必要性を絡めて積極的に区が参加することで、区のまちづくりに対する住民との距離が縮まり、住民自らも参加する協働のまちづくりが始まったといえます。

これらの活動の中で、地区の中で大きな敷地や広場を持つ愛恵学園は、地区のイベント会場として、特に年末の餅つきや夏の提灯行列という地域の大きなイベント会場として大いに利用されていました。

足立区では、地区の居住環境の改善やまちづくりの実践は、これまで愛恵学園が戦前より続けてきた隣保事業と同じ活動であることを、学園に説明し、地区の大きな緑やオープンスペースとしての愛恵学園の必要性や継続性を理解してもらうとともに、これらの機能を担保してもらうことを要望しました。

これらの活動が理解され、経済的な事情や学園の活動の社会的な役割や意義が達成されてきたことから、愛恵学園は閉園を決議することとなります。

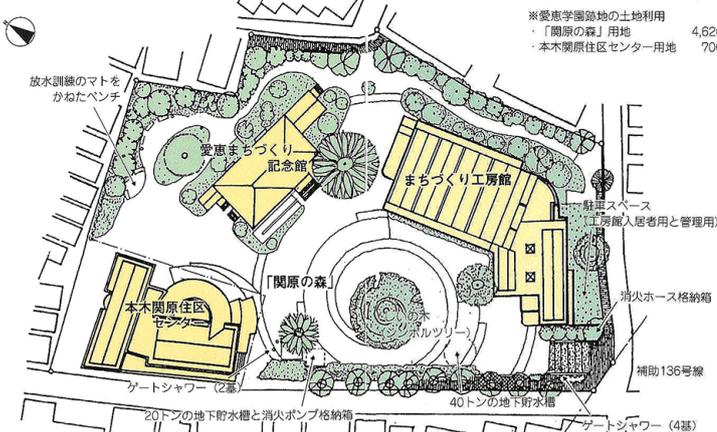
閉園にあたっては、施設や敷地のまちづくり活用として愛恵学園の活動を記憶する施設として保全活用することなどを前提として、区への売却譲渡することとなりました。

● 関原一丁目まちづくり構想



凡 例		
	コミュニティ住宅候補地	補助136号線 (都市計画道路)
	グリーンスペース (小広場)	幅員6.0m道路
	公園候補地	幅員5.5m道路

● 関原の森の施設概要



■ 地域インフラとしての関原の森

愛恵学園の隣保事業や足立区のまちづくりの過程を経て「関原の森」は、地域の様々な役割や思いを持った重要な施設として、地域のインフラストラクチャーになったといえます。

このインフラは、次の大きな役割と特徴があります。

- ① コミュニティ・インフラとしての関原の森
- ② グリーン・インフラとしての関原の森
- ③ 防災インフラとしての関原の森

① コミュニティ・インフラとしての関原の森

関原の森は、地域のコミュニティ活動をサポートする住区センターとまちづくり協力者のためのまちづくり工房館(共同作業所)、愛恵まちづくり記念館の複合施設群であることから、日常的には、住区センターが使われ住民のコミュニティ活動が行われています。

しかし、それだけではなく、継続して進めてきたまちづくりによるコミュニティの醸成があることで関原の森は地域の人々に愛されているのではないかと思います。

自分たちの住むまちをよくしていこうという愛恵学園や関原地区のまちづくりの活動の記憶を、この場所や施設は持ち続けているのだと思います。

当初は、指定管理者として地域のお母さん方が作る「母の会関本支部」と当 NPO 法人あだち・まちづ



《関原の森、地域との共同開催》

くり・ commonsの共同による管理体制でしたが、寄る年波には勝てず「母の会」は解散し、現在ではNPOによる単独管理となっています。

今後の管理については、NPO がどこまで地域の一員になれるかが重要なポイントと考えています。

②グリーン・インフラとしての関原の森

関原の森は、密集地区のまちづくりの中で整備された施設です。これは周辺には密集した住宅市街地が広がり、オープンスペースや緑が少ないことを示しています。その密集市街地の中で緑の拠点として、貴重なオープンスペースとして地域に親しまれています。

かつての愛恵学園は、うっそうとした緑が茂ってはいるものの、幼稚園であることから閉鎖的な施設でした。

現在は、24時間オープンな広場として利用されています。



《地域との共同による花植え花壇の管理》



《子どもたちの遊び場としての広場》

関原の森、光の広場の1日の時間割は、朝一番、高齢の方たちが体操利用し、その後の休憩場所として、午前中は近隣の保育園の散歩コースや遊び場として、昼は昼食をとる人や食後の休憩に活用され、小学校が終わる時間になると学童保育の児童や児童館を利用する周辺の子どもの遊び場、運動場として利用されています。これらの目立つ利用とは別に、朝夕のリハビリや散歩などの静かな利用もされ、老若男女を問わない利用がされています。

広場は、利用がされる中で、少しずつ緑が少なくなってきました。

これから新たなステージに向かうための関原の森として、少なくなった緑の再生のための計画や整備、活動を実施していくことになりました。

コロナ禍の中、地域の人や専門家の知恵を借りながら、行政とともに地域のグリーン・インフラとして、より良い成長を目指しています。

③防災インフラとしての関原の森

関原の森の整備を進めていく上で、市街地整備上一番の目的が防災性の向上でした。関原の森は、そのために様々な防災機能が整備されています。

まずは、①水を身近に確保する	降雨水を集水し貯水槽に確保
つぎに、②避難のための広場を確保する	広場を囲むような施設配置、ゲートシャワーの設置
最後は、③火災に備える	放水ポンプや初期消火設備の整備

公式的な避難場所ではありませんが、これら設備が宝の持ち腐れにならないように、消火設備はだれもが使えるように地域と連携した訓練を実施しています。

《地域参加の消火訓練》



《ゲートシャワー》



《消火施設 放水訓練》



■ 最後に

関原の森は、様々な条件がうまく作用した結果、整備された施設であるということです。愛恵学園の思想と活動、足立区のまちづくりのねらいと行動、地域の主団体の参加やまちづくりNPOによる指定管理など、これらは計画的ではなく、色々な要素が積みあがった結果といえます。

この契機を活かして当NPO法人あだち・まちづくり・commonsでは、次の段階へ進めていくための準備と行動を起こしたいと計画しています。

グリーン・インフラの拡充とともに、コミュニティ・インフラの強化をもめざし、「関原の森の再生へ向けた一歩」を踏み出します。

その過程で、地域住民の方の参加や地域の専門家、さらに区内において緑に興味があり、関原の森をサポートしてくれる人たちをも巻き込んだ「せきもりサポーター制度」なども展開し、新たなテーマコミュニティや連携可能なNPOとともに、コミュニティ・インフラと指定の関原の森の強化を目指します。

関原の森HP <http://sekibaranomori.com/> Facebook <https://www.facebook.com/machidukuri.commoners/>

● 関原の森の再生の考え方

